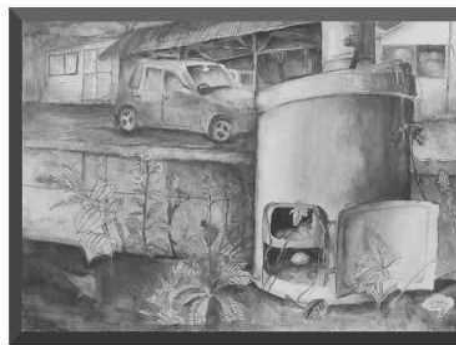
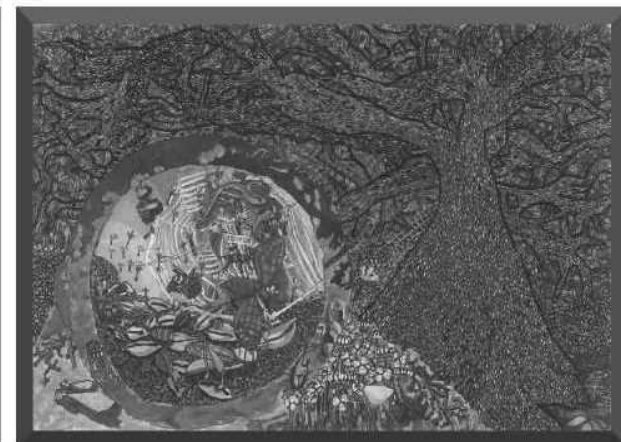
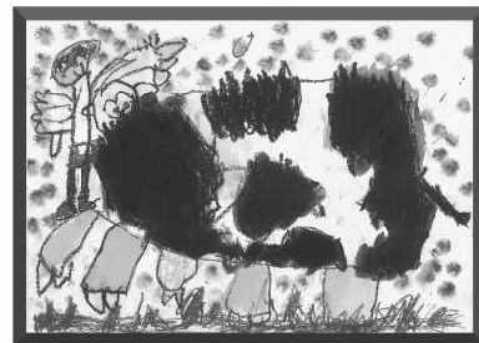


大分県のすがた

平成版

こどもの社会 (案)

～子育て満足度日本一を目指して～



－目 次－

(1) はじめに

(2) 誕生

- ①幼いいのち
- ②母と子と
- ③父と子と
- ④兄と・姉と

(3) 成長

- ①地域での子育て
- ②幼児期の教育・保育
- ③小学校・中学校
- ④こどもの遊び
- ⑤暮らしの中で

(4) 活躍

- ①地域の中で
- ②スポーツ
- ③文化

(1) はじめに



旧版「こどもの社会」昭和35年（1960年）3月発行

各章の中で旧版「こどもの社会」と対比して掲載しています。昭和から平成への時代の移り変わりとともに、子どもたちを取り巻く環境や様子の変遷を比較してご覧ください。

(1) はじめに

子どもは社会を映す鏡と言われる。

本書の前身である旧版「こどもの社会」が発刊されて50年前余り。その間、私たちの暮らしは大きく変わった。1964年には東京オリンピックが開催され、カラーテレビ、クーラー、自動車の「新・三種の神器」が普及した。大分でも、1963年に新産業都市の指定を受けて、鉄鋼、石油、化学などが相次いで進出。1971年には大分空港が開港した。

旧版と本書を見比べると、そうした生活の変化が如実に表れている。木製の机と椅子で勉強していた子どもたちは、タブレットを使って勉強するようになった。アルマイトの食器はプラスチックに取って代わった。チャンバラごっこがパソコンでの遊びになった。

だが一方で変わらないものもある。それは子どもたちの目だ。子どもたちが私たちに向けているまっすぐなまなざし。50

年経っても全く変わらないその純粹さ、ひたむきさは、子どもたちの持つ未来を切り拓く力を、改めて私たちに教えてくれる。

社会が変化するスピードは速くなり、将来はますます見通しにくくなっている。今から50年後はどのような時代になっているだろうか。そのとき、本書の子どもたちはどこで何をしているだろうか。生まれてくる子どもたちの目は輝いているだろうか。

私たちは、これからも「子育て満足度日本一」の実現に向けて取り組んでいく。未来を切り拓く子どもたちの力を信じて。

大分県知事 広瀬 勝貞